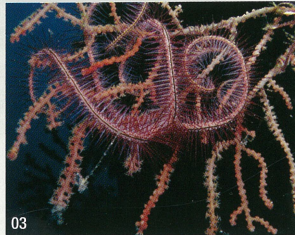


◎ 広瀬研だより ちよっとトリビアな無脊椎動物の話

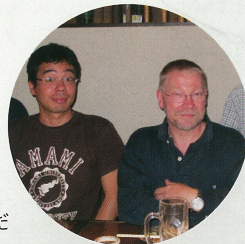
Text = Rie Nakano
Photo = Rie Nakano, Kaoru Imagawa,
and Dr. Jerome Mallefet

第36回 ホステスの 日々



(01) クモヒトデは棘皮動物門クモヒトデ綱に属する動物。中央の円盤状の部分を盤(ばん)という。5本の腕(うで)は刺激を与えるとすぐ自切してしまうことから、英語ではbrittle star(壊れやすい星)といわれる。写真は高知県で撮影したクモヒトデの仲間2種。(02) 深海に多いといわれるクモヒトデだが潮間帯やダイバー水深にも意外にいる。写真は沖縄本島・水釜の水深約15mにいたアオヒトデにたまたまついていた、盤の直径1mmほどのクモヒトデの1種。(03) ソフトコーラルに絡みついたクモヒトデもいる。写真はアカトゲクモヒトデ。(04) 両先生と慶良間諸島にも潜水調査に。(05) クモヒトデ調査隊は私の他に小淵博士と大学院生の吉田隆太、長屋和彦、藤井琢磨。さらに(オーシャンブルー)の今川部&岡崎祥子の両ガイドと広瀬先生の計8人。写真は居酒屋での調査隊解散式の模様。写真01, 03=中野理枝 02, 04=今川部(オーシャンブルー)

昨年の暮れ、10日間ほど沖縄で外人相手のホステスをしました。といっても嘉手納空軍基地近くのバーで米兵と酒を飲んだわけではない。研究室の来客を世話したってだけの話です。来客を受け入れて世話する人を一般的にホストというが、私は女なのでホステスだ。



だから正直なところ「クモヒトデなら同じ棘皮動物のウミシダを研究している小淵正美博士のほうが適任なのに〜」と思っていた。しかし藤田先生から「ジェロームが来たがっているから呼びましょう。せっかくだから共同研究でできればいいですね。」

心の準備が整った11月29日、ついにジェローム先生と藤田先生が那覇空港に降り立った。

その翌日からは怒濤の忙しさだった。宿泊先となった大学のゲストハウス〜研究室空間の送迎と、研究室〜採集地の送迎、採集活動の補助を調査隊員が交代で行った。のみならず「クローズアップレンズが欲しい」と言われればカメラ屋に、「刺し身包丁をお土産に買いたい」と言われればホームセンターにお連れし、夜は居酒屋でいっしょに酒を飲み、ジェローム先生が大学で公開セミナーを開くことになればその広報を行いなどなど、広瀬先生にバックアップしてもらいながら連日朝から晩までフル対応だった。しかし、クタクタのへろへろになって帰宅しても翌朝ジェローム先生が「昨日は3種類も光るクモヒトデがいたよ!」とうれしそうに言うのを聞くと「よっしゃあ! 今日がんばってクモヒトデを探そう!」という気になったのだから不思議である。

事の発端は先月号で紹介したハナデンシャというウミウシの論文。そのMy論文を読んだジェローム・マレフェ博士が昨年夏「沖縄でクモヒトデを採集したい」と言ってきた。博士は発光クモヒトデを研究するベルギーの大学教授である。

この時「これは困ったことになった」と私は思った。相手が研究者でも、日本語が通じない人の相手をする点においては嘉手納のホステスと変わらない。今までも広瀬研究室を頼って琉球大学にやってきた大学院生や大学教授を多少お世話したことはあったが、英語でつきっきりで相手をしたことはない。それに私はウミウシが専門。ハナデンシャはクモヒトデ類を餌にするが、私自身はクモヒトデに詳しいはずもなく、分類も「足の長い白いやつ」とか「赤い縞々のやつ」「小さくて黒い波打ち際にいるやつ」くらいしかできない(→こういうのを「分類」とは言わない)。My論文に登場したハナデンシャの餌たちも、私は標本を作っただけで分類はクモヒトデの専門家である国立科学博物館の藤田敏彦先生にお願いした。

沖縄での調査は中野さんと小淵君にがんばってもらって」と言われ、広瀬先生からも追い打ちをかけるように「世話係は中野さんがするように」と言われた。先生がたのメールの行間には明らかに「これも博士になるために必要な訓練!」「英語ができないようでは話にならない!」と書いてあった。そこで覚悟を決めてホステス役を引き受けることにしたのです。

秋になり、ジェローム先生から「できるだけいろんな場所に潜ってさまざまなクモヒトデを集めたい」「どのクモヒトデが光るかを調べたいから暗室を使わせてほしい」「実験道具もいろいろと使わせて」「宿泊先の手配もよろしく」と、数々のリクエストが(英語で)書き送られてくるようになった。やがて「理枝は沖縄で5年も潜っているのならクモヒトデがどこにいるかもよく知っているんだろうね!」と期待値100%のメールが届き、それ以来私は潜ってウミウシではなくクモヒトデを探さようになった。そして「どうがんばっても私1人で10日以上も外国人を世話するのは無理だ」ということに気がついた。急いで学内にクモヒトデ調査隊を結成、心強いことにジェローム先生滞在日程のうち前半の数日は藤田先生も沖縄に来てくださることになった。

あれから1か月。思い返してみれば、ホステスの日々は大変ではあったが楽しくもあった。世間では世話したり世話されたりで人間関係が深まっていくものだが、研究者の世界においては世話のやりとりで研究が進むことを実感した(もちろん人間関係も深まります)。今回の調査結果が論文となって世に出る時が待ち遠しい。



さまざまな動物が発光するが、クモヒトデの中にも発光する種があることが知られている。しかし、どのクモヒトデが光るのか、詳しくはまだ調べられていない。なぜ光るのかについて

ては①光ることで捕食者を驚かせて捕食から逃れるため②光ることで餌をおびき寄せて捕食するため③同じように光る同種の個体(配偶者)を見つけるため、などの説がある。写真= Dr. Jerome Mallefet

文=中野理枝

監修=藤田敏彦
国立科学博物館 動物研究部 研究主幹 理学博士

Profile >> '87年OW取得。'96年頃ウミウシに開眼。'04年に図鑑『本州のウミウシ』編集・執筆。昨年6月15日にソフトバンククリエイティブより『海に暮らす無脊椎動物のふしぎ』上梓。琉球大学大学院 理工学研究科 博士後期課程3年次。あと1年大学院生をやることになりました。⇒hofukutei.exblog.jp

Profile >> 棘皮動物の魅力にとりつかれ、学生の頃からクモヒトデ類を中心とした棘皮動物の研究を続けている。著書に『ヒトデ学』(東海大学出版会)、『小学館の図鑑NEO 水の生物』など。